

三宅島の火山活動解説資料（令和3年9月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

地震活動及び噴煙活動は低調で、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量も極めて少ない状態が続いていますが、山体深部の膨張を示す地殻変動は続いており、山体浅部の膨張を示すと考えられる GNSS の基線長で伸びの傾向が 2019 年 4 月頃からみられるようになりました。火山活動は徐々に高まりつつあると考えられます。また、主火孔の噴煙活動は弱いながらも続いており、火口内での噴出現象が突発的に発生する可能性がありますので、山頂火口内¹⁾ 及び主火孔から 500m 以内では火山灰噴出に警戒してください。

噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴煙など表面現象や火口内の状況（図 1～3、図 4－①・②、図 5－①・②）

今期間、坪田、神着に設置している監視カメラによる観測では、山頂火口からの噴煙は観測されませんでした。一方、山頂火口北西監視カメラでは、山頂火口内の主火孔から弱い白色の噴煙が上がっているのが確認されており、噴煙活動は低調に推移しています。

山頂火口北西監視カメラ画像の解析では、山頂火口内の主火孔内及びその周辺で引き続き地熱域が認められました。山頂火口内の地形、噴気や地熱域の分布に特段の変化は認められませんでした。

山頂火口からの火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は極めて少ない状態が続いています。

・ 地震や微動の発生状況（図 4－③～⑤、図 5－③～⑤、図 7～8）

火山性地震は少ない状態で経過しています。火山性地震の震源は、山頂火口直下の深さ 1～2 km 付近に分布し、これまでと比べて特段の変化はありません。火山性微動は観測されていません。

・ 地殻変動の状況（図 4－⑥・⑦、図 5－⑥・⑦、図 6、図 9）

GNSS 連続観測によると、2006 年頃からみられている山体深部の膨張を示す地殻変動は継続しています。

また、2019 年 4 月頃から、村営牧場南一雄山北東の基線で、山体浅部の膨張を示すと考えられる伸びの傾向がみられています。

1) 山頂火口内とは、雄山山頂にある火口及び火口縁から海岸方向に約 100m までの範囲を示します。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ (https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php) でも閲覧することができます。

次回の火山活動解説資料（令和3年10月分）は令和3年11月9日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所及び東京都のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『電子地形図（タイル）』『2万5千分1地形図』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています。



図1 三宅島 雄山山頂部の状況
坪田監視カメラ（9月24日）による。

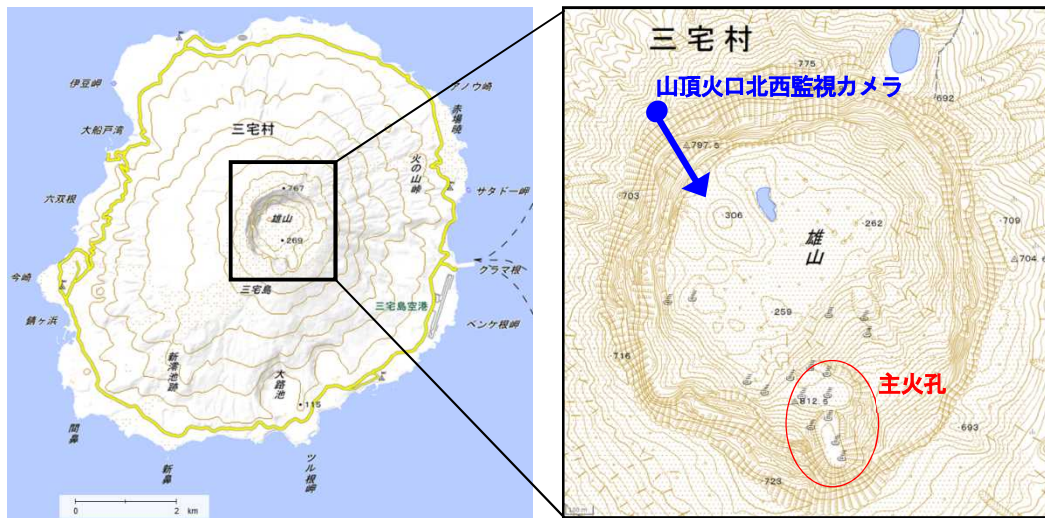


図2 三宅島 山頂火口北西監視カメラの場所と撮影方向（図3）

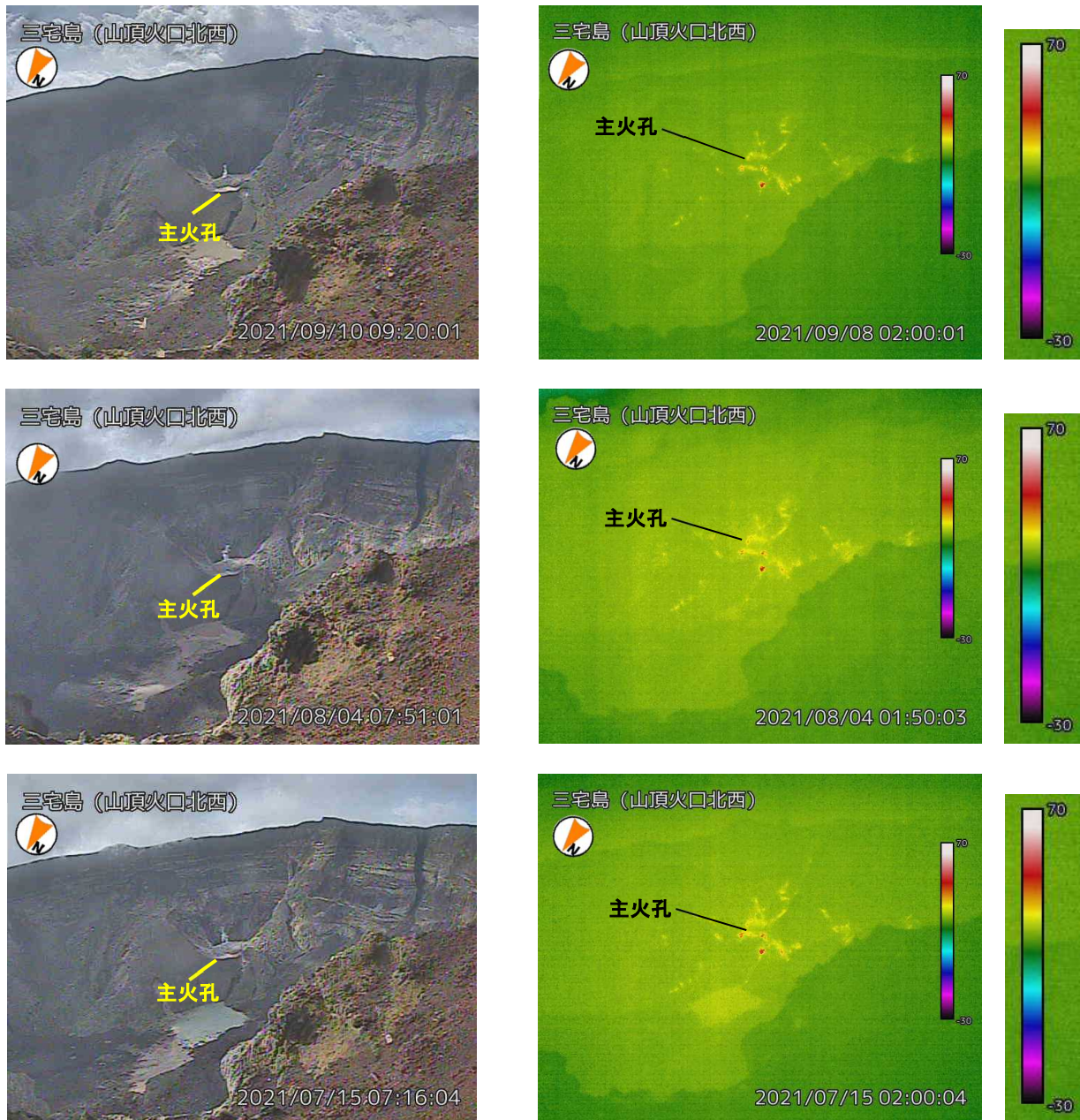


図3 三宅島 山頂火口内の状況（山頂火口北西監視カメラの可視及び熱赤外面像による）

- ・ 前月、前々月と比べ、山頂火口内の地形及び噴気の分布に特段の変化は認められませんでした。
- ・ 前月、前々月と同様に主火孔内及びその周辺で引き続き地熱域が認められました。地熱域の分布に特段の変化は認められません。

※9月（上）、8月（中）、7月（下）の代表的な例を掲載。

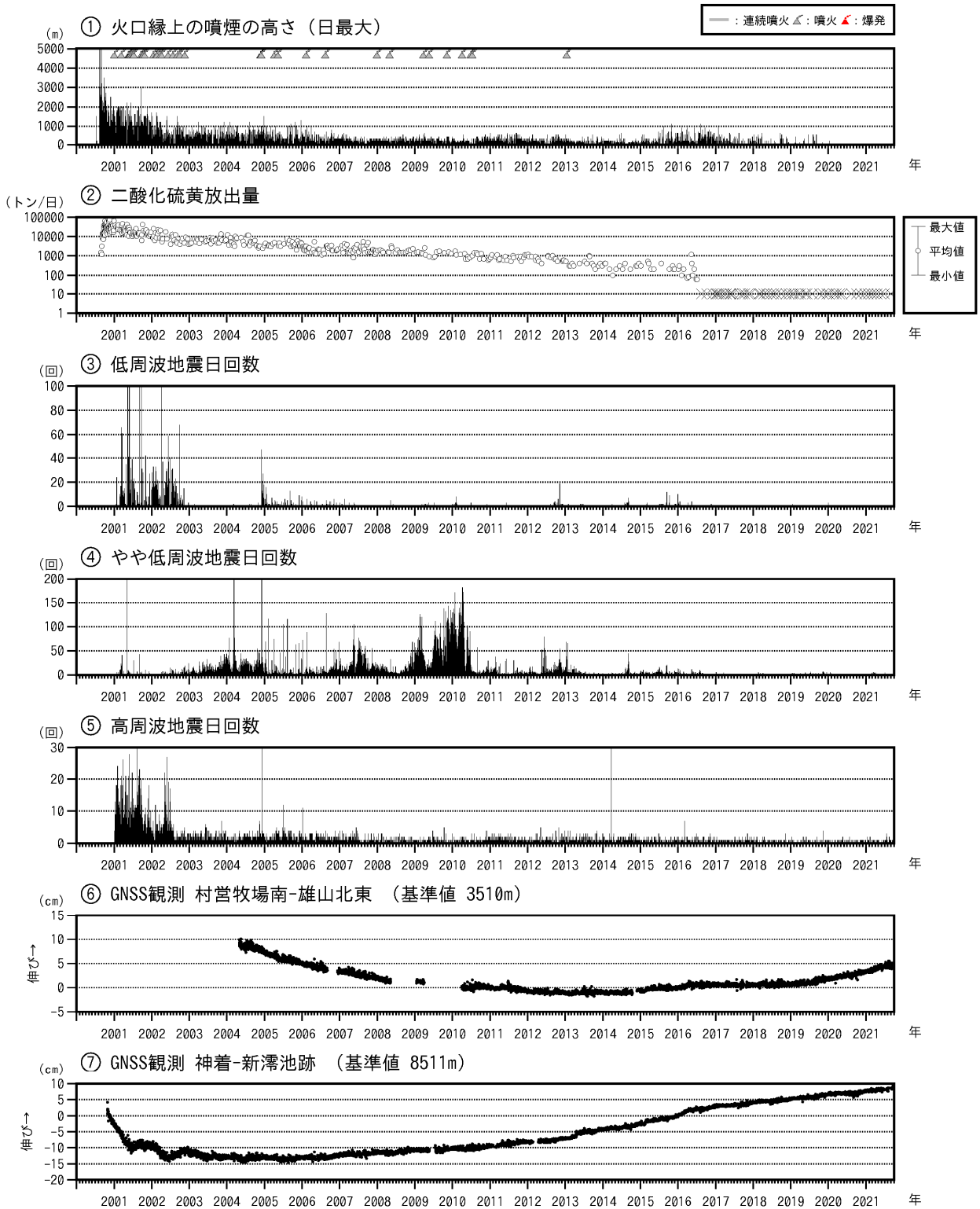


図4 三宅島 火山活動長期経過図（2000年1月1日～2021年9月30日）
 ※図4の説明は次ページに掲載しています。

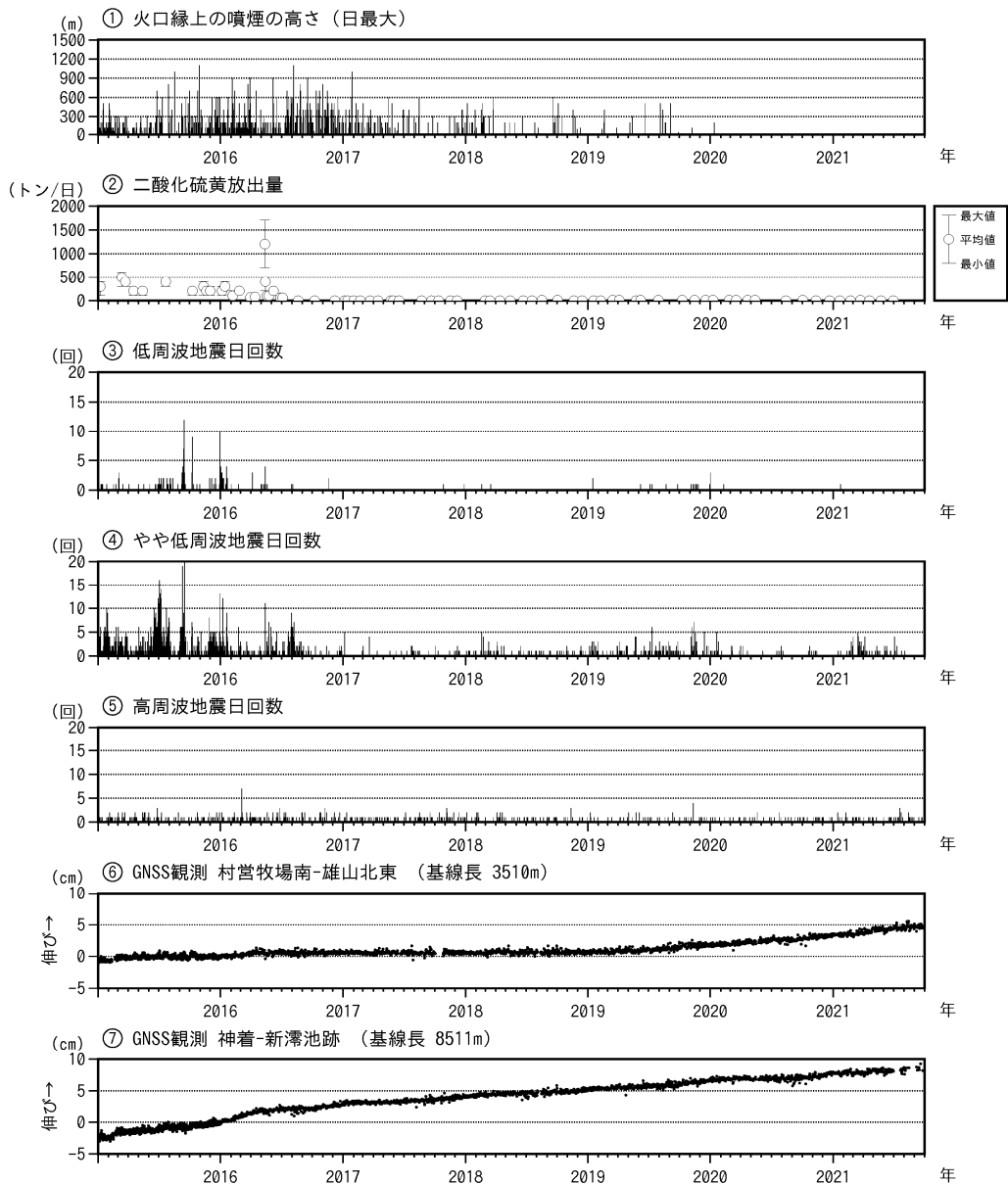


図5 三宅島 火山活動短期経過図（2015年1月1日～2021年9月30日）

図4② 2005年11月まで、海上保安庁、陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊、東京消防庁及び警視庁の協力を得て作成しています。×は数十トン程度以下、もしくは検出限界以下を示します。

図4⑥⑦、図5⑥⑦ 2010年10月及び2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。GNSSグラフの空白部分は欠測を示しています。

図4③④⑤、図5③④⑤ 火山性地震の種類は図9のとおりです。

* 火山性地震の計数基準

2012年7月まで：雄山北東の上下動成分で最大振幅 $12\mu\text{m/s}$ 以上

2012年8月～11月：雄山南西の上下動成分で最大振幅 $5.5\mu\text{m/s}$ 以上

2012年12月～：雄山南西の上下動成分で最大振幅 $6.0\mu\text{m/s}$ 以上

- ・ 2020年2月以降、監視カメラにより火口縁を超える噴煙が認められておらず、噴煙活動は低調な状態が続いています。
- ・ 地震は少ない状態が続いています。
- ・ 山体浅部の膨張収縮を反映していると考えられる⑥の基線では、2019年4月頃から伸びの傾向がみられています。
- ・ ⑦の基線では、山体深部の膨張を反映していると考えられる地殻変動が継続しています。

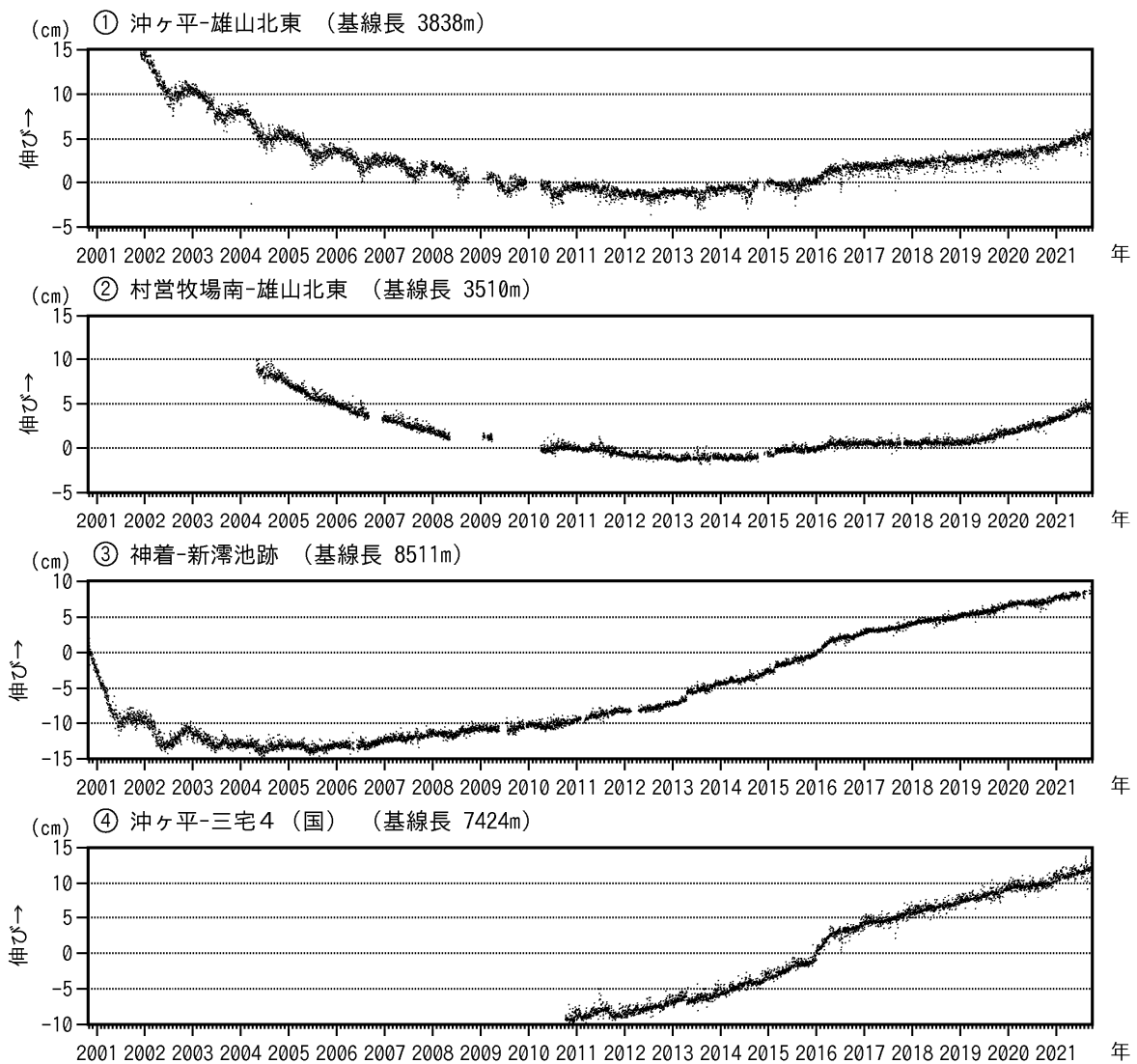


図6 三宅島 GNSS 連続観測結果（2000年10月26日～2021年9月30日）

（国）：国土地理院

2010年10月及び2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

グラフの空白部分は欠測を示しています。

- ・①と②の基線では、解析開始以来、山体浅部の収縮を示す地殻変動がみられていましたが、2016年5月頃から収縮は停滞していました。2019年4月頃から、山体浅部の膨張を示すと考えられる伸びの傾向がみられています。
- ・③と④の基線では、2006年頃から山体深部の膨張を反映していると考えられる地殻変動が継続しています。

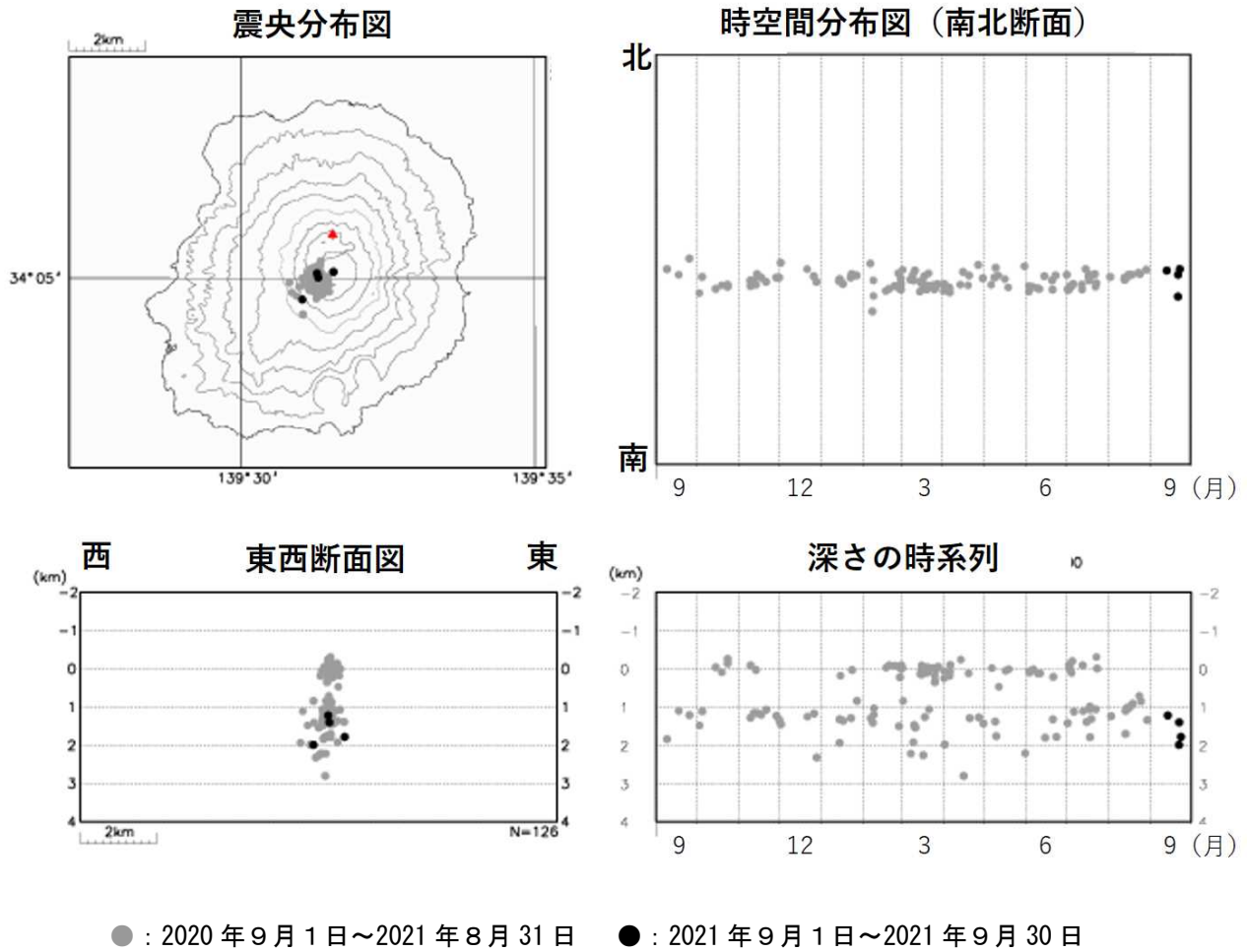


図7 三宅島 震源分布図（2020年9月1日～2021年9月30日）

- ・火山性地震の震源は、山頂火口直下の深さ1～2km付近に分布し、これまでと比べて特段の変化は認められません。

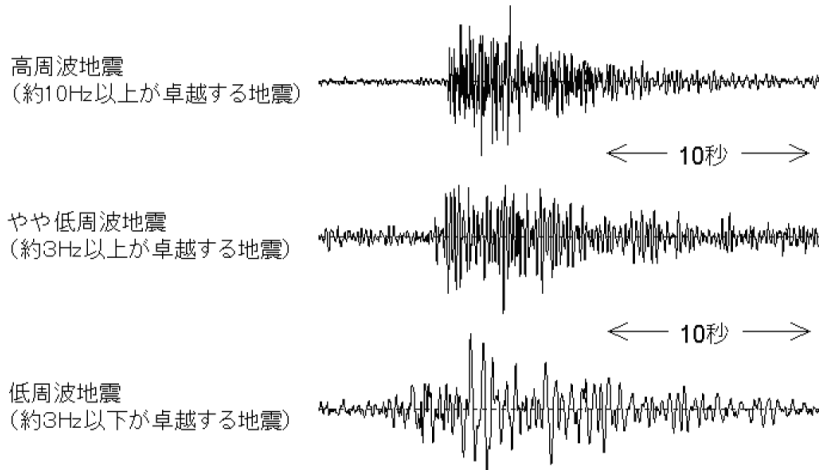
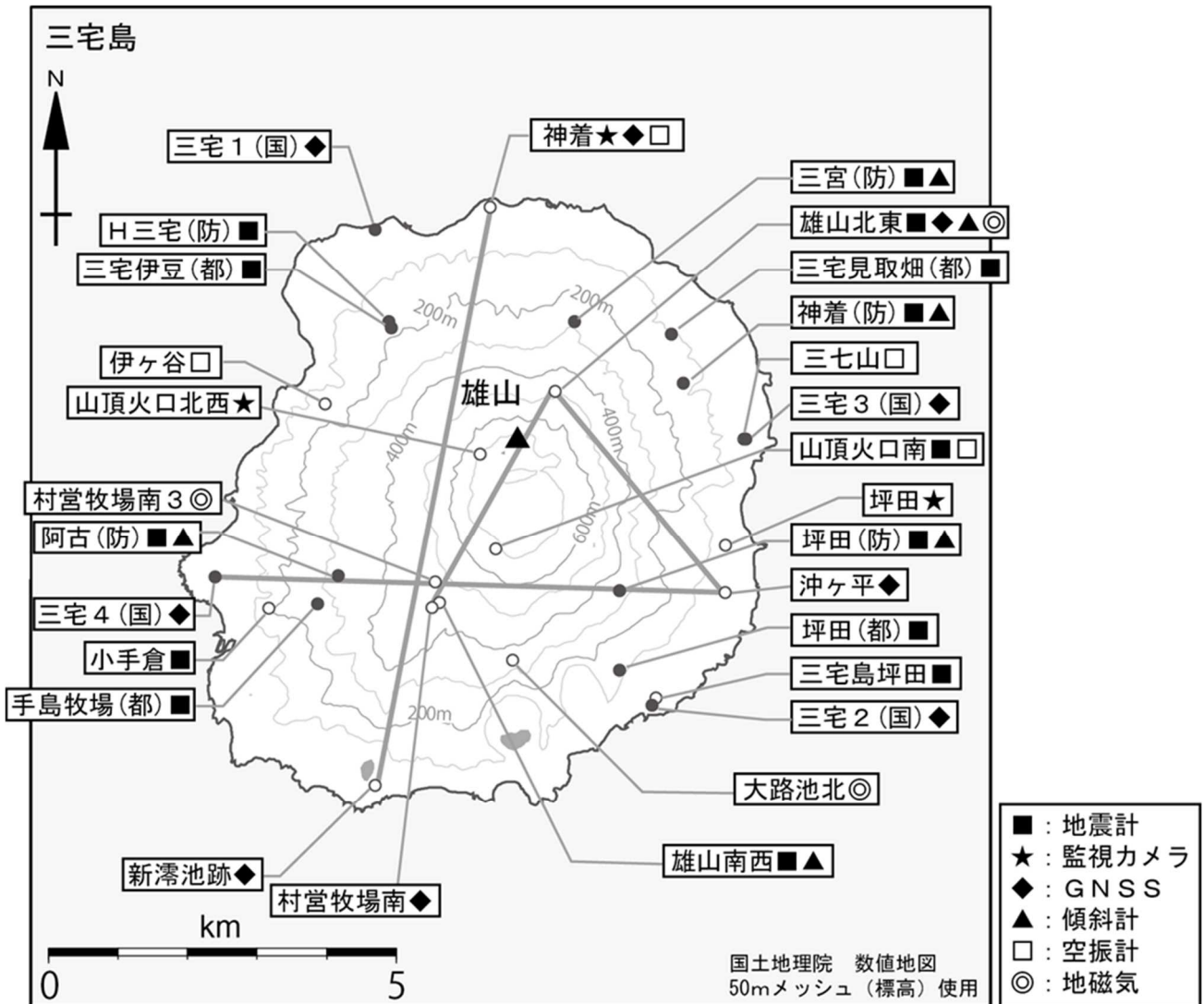


図8 三宅島 主に発生している火山性地震の特徴と波形例



小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国) : 国土地理院、(防) : 防災科学技術研究所、(都) : 東京都

図9 三宅島 観測点配置図

図中の直線は、図4～6のGNSS基線を示します。